



7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9

翁叔子今和放集卷之十一

卷之三

新創古今和歌集卷第十一  
毛利一  
あつらす  
もとへやまんじやまもよせ山の處に毛

吉小のまわすとすうみまはく游生まう神凡のえ  
人唐

不<sup>ト</sup>よゆ<sup>ム</sup>候<sup>ム</sup>と<sup>シ</sup>雨<sup>の</sup>はよ<sup>ハ</sup>かと<sup>シ</sup>の<sup>ト</sup>もつ<sup>ム</sup>る<sup>モ</sup>事<sup>ヤ</sup>  
女<sup>ガ</sup>す<sup>テ</sup>う<sup>タ</sup>り<sup>リ</sup>  
在<sup>ス</sup>不<sup>葉</sup>平<sup>モ</sup>れ<sup>ル</sup>  
去<sup>ム</sup>日<sup>母</sup>の<sup>ト</sup>は<sup>シ</sup>黒<sup>乃</sup>と<sup>シ</sup>わ<sup>衣</sup>を<sup>ま</sup>れ<sup>ル</sup>と<sup>シ</sup>も<sup>レ</sup>と<sup>シ</sup>  
中<sup>ノ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>衣<sup>フ</sup>は<sup>シ</sup>う<sup>タ</sup>り<sup>リ</sup>  
延<sup>ミ</sup>表<sup>ル</sup>四<sup>ツ</sup>  
未<sup>タ</sup>色<sup>コ</sup>よ<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>わ<sup>ね</sup>た<sup>ム</sup>ゆ<sup>ム</sup>  
未<sup>タ</sup>色<sup>コ</sup>よ<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>わ<sup>ね</sup>た<sup>ム</sup>ゆ<sup>ム</sup>



卷之三

和泉式ア

家をえりあまねうとすまうい我のとくや西ん  
はくと山あドあけ山もましとあひづかわらま  
えがふくみりきのとくにうつり  
市内後難言都下  
あれやく人ふけけまくふくよんたくあらん  
トウキヤサツフリ  
人あれどあふんち見乃ゆアめれりとやくら年  
赤ゆくよけのとくにうつり  
清家元輔  
あやんあめくらの様家もひ原わくとおきま  
季とくひまちあけますふむちくあまけたまのとく  
牛内後難言都下  
やくうちまちうきとおもてつわむのくすまにあらん  
きくらす  
わく山の巣をひかゆれりふくをみくやふ  
おほきくはまのれあやふよのとくのとくがほ

三

二

新嘉坡之會久未到此一遊  
特啟者故在新嘉坡

右上一節は其の事とあわれと云ふは、かくの如きを  
かくまつて合ひて爲めの事也。右上二章

之則無歸宿矣。是故人君之於其臣下也，猶父母之於其子也。

到此一游  
丁巳年夏月  
王德山書

おねがひあれの深きにてはくとまな

家子す今けりか友志のをと 指政を改官

お存りやうふよむのありわへね袖と人のえど

席上法師

あひまわらうるうのうも  
あくまでもうたうとく

もひつやう年のはじめにあわまつた筆

蒙古文書  
元高麗

モハシキタマニシテ  
モハシキタマニシテ

おれでひうちあけぬタト秋のまぢて月夜

三  
二

卷之三

わのあいもく食ひやく床の原ハタケノハラとれつきの松

百事可憐爲けり可悲矣  
入後お嘗て未敢方々

は泉底をのどぐるをひきもとどりてひまうけり

はしけとおとせんとほくわくのよし

トモシテアリハタマニシテ  
トモシテアリハタマニシテ

卷之三

國ゆけども未だ未だ也、秋夜のちりく叶ふる

卷之三

沙門院の御子、おまえの事は、我方の力よりあらかじめ  
うきぬとやまうきもそなへておうりそ 三條院公彦(右近)

源氏物語

六月既望，因游南嶺，至大庾嶺，宿於南嶺寺。是日晴朗，山中氣候殊  
不似夏，但風氣甚寒，衣裳猶須著。夜半，忽聞急雨聲，天明，雨已止，但見

卷之三

卷之三

馬周集

スノウニヤハシキトコロサルシテヨウニハシムヒモニアレ  
共協佑ヨウジタツメテフナリ法寧合アソシテ  
財也ナラヒトハナリトセヌキヌ也ト社也  
チ内也

共傷佑よけり阿波國事よりまかせやうめうてうけり法螺寺をあ廢寺改下  
今うどひよとれたのえふゆくゆきちれぬねと社之  
多

卷之三

狂歌  
人麿

人廢

みちのくとあわせのまへあはれぬよ  
うもくらうも

82

四

おのれの身代えもとひきのむかと計りんとぞ  
あらは乃とまんざりうがくあらそひのて身をま  
けめを乃手繫れふすおわらアノ神をあらう  
やまとのもとへづれわらみうわ神み教えどもん  
木乃は是其事次々ア往くもとまのとさ  
御神ノ也ゆづはよ候、さるわづくアみどり要  
かの身もうちうがり、一朝もきの身もうはれ、中納言義  
多の身はがまよのう、御神のやまとをみゆきあれ  
ありえ  
蘇家元真

家内事もさういふ事もあつたが、この事は、かわら書

卷之三

卷之三

わがやんくらひの櫻花とおれよ  
あまゆの秋波をくわせつけまへ

れの胸の上

小年  
まつり

卷之三

久遠のわが身の爲めに  
かくもかくもかくもかくも

由子之勞於也

卷之三

ありうる  
徳義

本草綱目卷之三十一

三  
五

河東乃ち其の行はる所の事なり

後漢書

かくのうの舞はるかにせんじよほとく

物事の如きは、其の勢いの如きを、

ゆのとくわくめん人博  
のとくわくめん人博

おおむね内閣のものと見えてゐる。 桂半痴云師門

萬事如意  
高貴之堅定

卷之三

紀事の事の廢止を以て始が終たる事無事

法性者入爲沙彌而受戒者可令不一精牛納去師後

はるかに人をよみがへる  
事無くすむべし

卷之三

御内閣の事務は極めて忙  
い。左近は其の手帳を借  
りて、その間の事務を代  
理する。左近は其の手帳を  
借りて、その間の事務を代  
理する。

の  
の  
の

卷之三

卷之二  
萬葉集卷之二  
葉平野ト

郭子化今和歌集卷第十二

卷之二

草の音を聞きよとすを思  
おもふ度々更復せ  
下りてゆく煙の下に紅葉の秋の行

六

卷之三

此の後は、  
おまかせで、  
火爐と、  
煙草を、  
どうぞ、

少林禪

三書禮放

卷之三

忠惠公  
お貴政宣

卷之三

高麗の事は  
日本に傳へ  
て其の國の  
事も知る  
事なり

段富而病

مَنْ يَرْجُوا لِحَافَةَ الْمَوْتِ

愚鷄のうらと

お伊達山

萬どじいとくひのゆへゆるよしやくわづじむり  
されどわる愚くらを禮仕り 花園左衛門  
人よれぬ愚よ我方ひとくめたよくめうへ激こきう  
あいーらす

わがといふぬくらを無事とくとく神のあつと  
無事のうらと

人よれぬくらを無事とくとく神のあつと  
無事のうらと

佐原

外洋

三

二

かみをまかせ合ひ

たまはるを起え

おもむきうきとひとりにねうちもく死しのこの言葉

あづけやつてアラケ

白毛を落すを後め

おわすじと解てのをとあらしきへあれどもてまくぬうす

あまくま十ゑす合

接歎を取合

山川の麻のそと衣わばあらわして月日や秋すすりて

秋言がよくうるさき

芳ふ處

ほんとひて月見秋乃門すすんでゆく身ひのうを

白木をあらか

白毛を落すを後め

おま車ひのせの里れののとあよめめうれらるる

白毛を落すを後め

白毛を落すを後め

ちうはよきのよよまめわからての病うけづ神のまへ

あらう

白毛を落すを後め

白むう病ひとび人れわよ神沐もしてあらへん

あらう

白毛を落すを後め

かくその命とあらぬせがれつまめのやまくまが

あらう

白毛を落すを後め

三

著者不詳

あゑいぢのくじうれのくじうれのくじわうすのくじわうす

合あま黒裏すあくす落汚けり内あらああとを落す落汚けり

りのくじうれのくじうれのくじうれのくじうれのくじうれ

合あま黒裏すあくす落汚けり内あらああとを落す落汚けり

クキとあらうとあらう

合あま黒裏すあくす落汚けり内あらああとを落す落汚けり

りのくじうれのくじうれのくじうれのくじうれのくじうれ

合あま黒裏すあくす落汚けり内あらああとを落す落汚けり

くじうれわまの神かゆうて落汚けり内あらああとを落す落汚けり

接歎を取合あくす合へて接歎

東甚法師

著者不詳

合あま黒裏すあくす落汚けり内あらああとを落す落汚けり

接歎を取合あくす合へて接歎

東甚法師

著者不詳

まのすとくより

まわらひあらはれとせにゆとまよ神よなむ神よ  
食あはれを食す家す食す 肩法師

みり候乃ちれちあらゆと祭も門こととあよこもや

百々千千

まふくともゆんねば祭つむわうへれ神のまもん  
まくひめりあまますてけりと祭はすまく食

ふ童事食す

模擬政官

方ふうへりとの面教を済あはんまきわとあうわらよ

あううす

大前立美家

まめらにまこづる御をとくきあはすも神あはれ  
まくひめりあまますてけりと祭はすまく食

まくひめりあまますてけりと祭はすまく食

正三位證

めいあままく乃向せとせんせめてい林と鳥とまくとが

三

九

まきわらひとまのりをとくと

模擬政官

模擬政官家食すまく食す

中主立美家房

まみりのりと傳ひの歴すゆづるよもめどもぬ

家政外

ゆのひれ標と様うちのゆううちめどもぬ

大中御文庫

あひのとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

大中御文庫

まみりのひじのひじのひじのひじのひじのひじのひ

大中御文庫

ばあとあひのひのひのひのひのひのひのひのひのひ

大中御文庫

西けのひじめり用とやわびりまやあれぞその歴す

大中御文庫

本乃あ花のあ花のあ花のあ花のあ花のあ花のあ花

大中御文庫

接函至故處來者多有不合不一審其有無勢力

久遠とどうぞと  
お門の年へてもぬるよしと  
望が

色の如き  
此の如きの事より  
是處に於ては  
其處に於ては

あらまことかくはんじゆうのうわく

八事度々余  
の事もあらへ  
てはまつたる  
事もあらへ

卷之三

悲夢二

中宮少海のうめがけりも  
乃山未見てひしげ

借因二司也

要うかとあらわすよひておもてうふをあらわすうりやう  
筆酒云  
張紙を拂ひとせり草枕のい様とちひとす  
あきらす

葉平野下

事の如きは、おまかせあれ

人の事よ、うりをあそおうつりゆ、廣義  
せきぎやあすくふるをかひとまつて今九月  
くわづか

卷之二

武子內家拳

ましめの松えのきのまを以神とみ  
草約よゆけぬよあくわやかてはあてつうりはく  
あらわすのめいわむれいのめいわ  
神のわれづ

まことに  
その命をうる

如來法師

人今すれどもあつてゐる  
興奮

卷之三

卷之二

卷之三

This image shows a vertical strip of aged, yellowish-brown paper. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and small dark spots. Along the right edge, there are four circular punch holes, suggesting it was once part of a binder or folder. The left edge of the paper is straight, while the right edge is slightly irregular.

100

和泉式部  
松の木に  
人を抱ひて  
うなづく

三  
四  
行

馬アシれても人ヒトよりうれし  
ぬ乃ノまつみの風フウ也ヤがうらみよ  
女メイトコトリ  
名東花床ナミヒタハナベ

石渠記

あくす  
ち金度れお

卷之三

わの乃ちのうへ  
あらわにせんじ  
まくらす

卷之三

金と争ひゆうとあらまとすりりようりり  
義  
少さんくとのくわく背よトとのくわくれん

の  
通  
じ

わの身は二月九日まく政乃神のまぐれてたまに夢

釋名

空とのあひぬ事もすばれりとくまくやへゆ  
九月八日はもまく東むらむとくわせゆよすはまほとくめよくうき  
左寧勝教子親王

皆のよれの月乃入まてよやまとひひとくわづれ  
まくらす

心もやね御身のゆさうすみちの定よそゆく  
とくまえりとくまほりせり  
延喜院す

もくれをぬよけうれおみのわまとのはそほまくらげ  
れす

おみのゆさうれをだらくに消くとくわゆとく  
お融院す

まくらすはいのゆうみる今うそねとくわゆ  
豫津院

まくらすはいのゆうみる今うそねとくわゆ  
豫津院

うのゆうはいのゆうみる今うそねとくわゆ  
豫津院

一一

三

二重院御内ちよまうきとすう事とふと二重院御内

あらうす

舟渡師

西教のすすきよしあれ石浦と人の月よひて  
西教のすすきよしあれ石浦と人の月よひて

船萬多

接駁堅店

えどん船とみのじゆねふとぬくゆうゑの船の  
あらはうきとむまがるはなれぬううりりかくめ  
船めてゑよつきほなせのぬりとととよはくまうく  
まみよもと一かくとてゆうけうよじくゆうてねにほわせ  
海うらあらあらうの船方れい船てうらうらせ乃是の

二重院御内ちよまうきとすう事とふと二重院御内

船りうをゑはるまねうらうらまねうの神とおも  
船等まへたおまく木船をまく合う二重院御内

庭ふねうタクひまつてうらうらやくれとゆまの波もゆん

あらう

舟底

船育ふまくねのあうひかわふあまくねのう

舟底

是とすすみにあはあやせん書を綴モ命をね

舟渡師

きの船とまつああやとこもぬくよづれつとくめれ

船家を補

大井川のせだのあれとくつまつとあめ書てやあ

舟渡師

夕書とくねきうかりうかうあらやあらとやうとく

船家を補

ぬのえほひくまくのあらと福をうめくまくの月

舟底

あまくねと草木とす合ふ夕書とくつまと暮を夜

舟底

船の下とあらわねの夕書とくつまと紡出一あとやかのと舟

舟底

ゆいふうのとあつ風とじよくとくとすあくひの

舟底

あらへうす

西行法師

人をこそそのまゝにゆきあにまはる處の事なり

八重度も含

やめやうあむじうれうれのじうきを雲風のう

みのをとく全あらぬよどか取立われ松風のよ

今れどものりと秋風とひゞきもの月やまくいん

春風のや國へむかひ木の下ひづれ空う山のもく

鶴鳴とそよぐ

落葉を散る

のりあた景やと培育せのまゆうてとめめまゆう

ゆうとわゆあらわしん被服さうれあら服裏月

あらうす

とくふく

あらんとひ秋とひむれがみのまゆうひまつとう

人九

夜を山雨聲にて室に来御者多く歎うての独よ稀む  
自爲聲を各うき声仰ひて居てもあひて居ちゆきひまよ病ひ心え

を車いすや詫の聲もじ草の下うらを聚うれよくら  
る思ひ

大歎嘆はゆきともあひて居ちゆきひまよ

苦歎子女王

あれゆひはれやほテ角まれ端やう衣袖とぞ如ん  
わらはねぢうひにゆう

以上見聞

あらうす

中酒を散る

是れゆひまゆの聲車れ三昧くゆうちもうはゆまうれ  
三昧度をまよひけむひうとせむひうの安達と竹を

せのうむの秋風うの聲のうとくを計のうとく

延喜院

あらうす

中酒を散る

是れゆひまゆの聲車れ三昧くゆうちもうはゆまうれ  
中酒を散るやれ聲はれもひく無や酒え

中酒を散る

あらうす

白雲草中ノ  
山嶺の渡れぬ處をうづびて狹ひき谷にまくえ  
狭ぬとあはうる處の床よりすゑつてのむ  
えのうよと御ゆきのまくはりとくふ  
まくらぬ  
書之師也

かを重んじてまことにとては我らがまことに思ひうけむる爲めに  
はといふとあつてゆくにゆくの事なり。従へばわざわざち  
あきらめをせしもあはれうともうて久留の所にては後念  
のあんづまづか事とてはもうてはもうてはもうてはもうては  
お  
衰すを非うる爲とて爲めに清めつゝぞ御力あるはれ  
ありられ  
はれども相の我よあくはれはれはれはれはれは  
山彦良  
何ゆすかとてまのやうに下すてまのやうに下すてまのやうに下  
殿富佐之彌  
東をまし今日也行ひれ  
形アヌ病  
喜び人のあがみをあれる教きみのよりお詫び  
御法師  
身とあれ人のうちたがふ相手あらわす神

うきよかほのせやくすみのあそびらむかの方とお病され  
ゑのあそぶと笑うては世間の笑ひにてよ  
**新古今和歌集卷第十四**

### 魚寄四

ゆるすけりゆきよつうり

鷺真公

ましゆふをとめやくよしとゆひにゆるもうちがいわ  
あおゆきよしとゆひにゆるもうちがいわ  
あおゆきよしとゆひにゆるもうちがいわ  
あおゆきよしとゆひにゆるもうちがいわ

留里よまくとまく今とそあし様のくまとひす  
金霞あきらめよまくとまく今とそあし様のくまとひす  
絶わうり新しんれとまくとまくのあくまくとまくとまく  
日暮春ひぐれ新しんれとまくとまくのあくまくとまくとまく  
さくふりあつあやめ葉はわくね絲いとあらきとまくとまく  
あからう  
えの葉はうじうあらきとまくとまく  
ゆ風かぜよづまことまくとまく  
空そらおなじ縫ぬい每まい  
葛くずのとわくね我わ力ぢを林はやのゆくよづまくとまくとまく  
えやく葉はの葉はあくねあくね人ひとのうれゆ方ほう處ところ  
留りゆり

惠子女王 贈皇后文母



今  
朝  
一  
行

卷之二

此處之風氣  
亦復何獨到也  
予不以爲過

卷之三

萬世傳之不以子孫  
萬世傳之不以子孫

文  
獻

卷之三

雨朝の事は今よもやアハシラアハシの事ぢや

此卷之序

知音法師

とくに思ひやうの月の色がうつる。物の  
持てゆきあましむるの月の色がうつる。

卷之三

八編卷之三

の西紙  
北前本物の西紙  
西紙中ノ  
左上天皇

子多有數字合之

卷之三

卷之三

卷之三

蒙古文

今本集

卷之三

卷之三

主計とひづの名あえきの本は月からうりまほ

於中微云公濟

卷之三

右惠之塔題具

有家好

あらうらす

扶桑教本

さへせくまがく月は年はいゆくこ葉一叶や絶え

あ隆御下

鳥はねとひづのうつみともれそのやれきの月

そのあたねの月をりりぬよもやあらす年は取れ月

法眼宗家

今うれめれとね月ひめくわそちもとね草と生の月と

育ち秋をまかして月あ年とよども 扶桑教本

ヨリウカ絶つて宵とよもやあらすやい葉一山乃も芳月

有あれ下

ふくとまよとひづて紺宵のゆの月とうか

えあれ下

松山と翠一人づれれもと神山にあらんのこ月絶

ふみ草の合下

星と名えまゆる

ちうひうたぬれもとひづて紺とやまの庭れむま

三

十九

津島山あす合ふる事と

立庵禪教

むきとあらうとゑよがにきりぬのやうと観音の白毫

扶桑教本

あくとひづのう底の月乃またうきよ下りまほ

白毫をえ

めくと神ようく色死くとおれにゆれに茅との香りと

立庵禪教

松山とひづのうとおれに茅との香りと

立庵禪教

よどとあらうと神りやうりうん絶ゆの底の月のすり

立庵禪教

風ぬうの底のやうもんとくふくうの月の静さるよ

立庵禪教

いそむく今うらのうれいと月日くとくの月と

立庵禪教

す音あら合

あはれ

さひゆ遊うとのとよみやんの自のやられ泣乃山風

ニ裏虎口松葉のさりけりよ

新アハ花蕙

とお人ゆへ定めあるよまくふとうをもみされ

さきう

とおひきくんわとさひよそれもうみぬばせありとも

殿島虎痛

あひ法師

うやくかほ人とゆて怪えんあれとあらがひよ

今をあらやひゆと笑へるやんとその情あわうり

建仁元年三月吉合ノ一月不遇多のをと志門内食

あひやひち極力のうつとそのうじに後復にあきあ

松井酒井公達

ゑちかひのゆゆうとや和の景と清うをあん

太陽晝也

笑ひやあねあふ癡むとて曉をうらまふうちやい

有家也

寂蓮法師

寂林院丹霞

馬の云の紫川に成るるのあくに秋風そく  
あくに西風す令一翁り

慈政院

さひのうちあう宿とあはまくめにとく庭の松風

有家也

さくとくかうもじとあはむよこう夜のとよす松風を

ゆり法師

ゑひのけと林あう寝是れ小うみじうせのあやもとあ、

ゆり法師

衣もとあ人のよとがくみじゆく座との義あうう身  
義志ひ今をうむとタ向くれ萩ゆくせのとくきてば  
きくう

式内歌主

以日とまくゆくやのあやんぬタラの松風のち

あら合

あら合とわらあら育くよりうの宿の松風

あら合とけいよき不遇の心を岸甚法師

黒川の里の山のわらじ方いのうりの松風をて

あら合とけいよき不遇の心を岸甚法師

全玉

あら合とけいよきのまくわられあらくねれりと

有家外ト

あら合とけいよきのまくわられあらくねれりと

雜津



あれは其十の事もあらうがけりは

和泉守義忠

かのよはもはくとて御宿泊あればかのよとて御宿泊  
まわるやとあらむを思ふよりはゆゑねそとのよお秀

まわらし

藤原秀家

あれをいわせと爲と消るし活あつとまえのには  
今えといふものもあれりよしゆくとてのゆゑにん  
わざとの事より爲の消すとてのゆゑにん

和泉守義忠

藤原秀家

ふみのくらうが

かとくとて御宿泊の事の小暮とて御宿泊  
藤の木や爲の事もうちつまにいわうふるわを

藤原秀家

煙草消へやうと秋方の御宿泊のはじりしとやれつ  
ひきくとて御宿泊の事の小暮とて御宿泊  
あらせぬまゝ我のまゝや御宿泊の事れども  
ひきくとて御宿泊の事の小暮とて御宿泊  
寝計とくらん神の御されと風の川を御つせられ  
ちうよのあらうにゆづくゝ九月のまゝりけり重々  
あらやあらの村を阿敷つてあらばあアシタウヤん  
さりゆはれタ吉ひらかとてふみゆけり六郎おちり家  
あらちくとてたゞうれどもうるれどりふよせりと  
あらうの下を御代とておとくの御代とて  
あらうの下を御代とておとくの御代とて  
人金とね御えの御代とておとくの御代とて

藤原秀家

源のミナハサカの御事あらへる事すと申す

文書天皇御事  
及上是則

村のミナハサカの御事あらへる事すと申す  
うき念と申  
仁也の御事あらへる事すと申すと云ふ事  
いわく神事御事も白あわ衣子一が毛つてそわ  
あやこの波の下まよぐれでさりのうと称と申す  
浦の御事御事はの様もひきやまくと申すと  
毛うさんと申すの事もひきやまくと申すと  
毛うさんと申すと申すと申すと申すと申す

余どある事御事もあらへる事すと申すと申す  
いわく神事御事はの様もひきやまくと申すと  
今まよらはんと申すと申すと申すと申すと  
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申す  
毛うさんと申すと申すと申すと申すと申すと  
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申す  
やうの事御事もあらへる事すと申すと申すと

いはがまとうらのあゆ山をうけとすとくみあれり

我をうるむとてうへよまされ今とうふじかどひ

人也

夏野のさくはつわづれもよまれとひよりの

えよよし病ひやねませふると我神のうりく

八代玉

内核とうみのぶ川乃何風よいのあそびるをはなと

恨つわうれの神れうかみに枕のまくにあもやうれん

牛頭天王

わゆもももももももももももももももももももももももも

ほのまよにぬはなはうらうらうらうらうらうらう

清涼深長文

山口玉

根つわうれの神れうかみに枕のまくにあもやうれん

牛頭天王

わゆもももももももももももももももももももももももももも

ほのまよにぬはなはうらうらうらうらうらうらう

志摩

いふ御くみうめくみうめのまなうわぬへれどもう

庵彌管

おときくねのゆくよみまをねとひよまくはまくは

伊勢

春の木れまくわちとみうれらひ絶ふとくをゆく

咸明觀主

まろ木のまくまくうつてくとやくわくわくの教えん

かほ微子室

わくまくうつのうまくうれでうひうくまし絶えとくをゆ

美の木あいふくまくあくううううけ 神宣教主

くとあねてあくうまのたいふくまくまくまくまく

京基法師

源川力とうれくわくねまくとくわくまのうくみ

百丈院

あくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

法印

あくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

卷之三

卷之三

卷之二

あり。うす  
のうちくわづか、風味はさうりすまふと人の心もほんれ  
ふふたまうるべし。  
（室町尼寺堂文修）

あらう

卷之二

おまかせのまちとておゆきにむかひ  
おまかせのまちとておゆきにむかひ

卷之二

武子內親王

卷之三

5

さかの事の變色を恐れぬいと  
事も度既に有りますまけり内惠等  
皇太后等が更後像  
をも傳ひて西教をもとめんとせば  
さうも

卷之三

卷之三

1

三

かや小町

秋宣翁下

歌方よわふとのよしとれどくよまくよ  
うなやあらかよまくよまくよまくよまくよ

今をもあらむ活ぞ時中が水のかれりてさう歌ん

やひややすと山の松葉トシマツの葉とよれど

書平翁下

梅のむづのミヅミヅとえ我や人間はせぬ

あきやつり

文磨翁下

玉京うつとあらかよばつづのびゆづれ

川平

女川徵翁下

さくさんとえよそれあいが方よシカとあま

三

三

ありひでゆうひかひのわまざれどくよまよまよまよま

ありふきよまよまよま

共邦歸致翠親王

さくまくとまよもよもよもよもよもよもよもよもよも

さくらん

有恒

さくまよ遠すちむれどりくゑのれどよすくれ

さくまよ遠すちむれどりくゑのれどよすくれ

まゐだか原たづてくれ秋よもよもよもよもよもよも

まゐだか原

先哲太室翁下

まゐて秋よもよもよもよもよもよもよもよもよもよも

まゐだか原

秋宣翁下

初あめくわづとつとよもよもよもよもよもよもよもよも

初あめくわづとつとよもよもよもよもよもよもよもよも

秋宣翁下

とまくわづとつとよもよもよもよもよもよもよもよもよも

とまくわづとつとよもよもよもよもよもよもよもよもよも

秋宣翁下

往者れあらむ草木晴よてるれせりあらう歌とおき

往者れあらむ草木晴よてるれせりあらう歌とおき

秋宣翁下

あらうとくわよねをゆゆとゆくにゆくとゆれ  
ひきうきうきうきうきうきうきうきうきうき

ちうよのつまなびるよくさかから今いはくとせん

きううう

松中酒を敷去

ふもとゆをまづけいのちりそたのめどすとおもとゆと

せのうたとんづつまどゆすふゑまたとくらへ傳わき

きくきくきくきくきくきくきくきくきくきくきく

左葉雅歌

教えうがくうやせやせやせやせやせやせやせやせ

あくうう

人あくうううううううううううううううううううう

久木金子

我ようへゆきくゆきくゆきくゆきくゆきくゆきくゆき

左葉雅歌

今うつわわうととおぬめあぬめのうううううう

天

五

三

荒終

かくもあわをゆくおきあくとゆきあくとゆきあくとゆき  
ままもとむなつあくとゆきあくとゆきあくとゆきあくと  
秋の風あしきり風のふわよ秋のわよ秋のわよ秋のわよ  
くじゆたまきの後えくとゆきあくとゆきあくとゆきあくと  
背きのねうくとゆきあくとゆきのとゆきあくとゆきあくと  
夕霞ひむくとゆきあくとゆきの浦れもむくとゆきあくとゆき  
ゆてひむくとゆきの浦れもむくとゆきあくとゆきの浦れも

